

琉球大学学術リポジトリ

豚の飼養管理

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-07-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 蒔田, 徳義 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/21167

豚の飼養管理

蒔田 徳 義（岐阜大学農学部）

1 豚

豚は人類にとっては、最も古い家畜の一つで、多量の蛋白質と脂肪の供給源として、きわめて重要な位置を占めてきた。ことに近代になっては、その必要性和重要性はますます加わって、豚肉、脂肪は日常生活に欠かすことのできない食品となった。

したがってその飼養はますます盛んとなり、需要も急速に伸びつつある。また豚は農業家畜として、農業生産上欠くことのできない動物である。それ故、養豚上その飼養管理の研究、技術の普及は重要で、これによって、経済的に飼養し、生産をあげることが必要な問題である。

2 飼養管理の基礎要素

豚といわず、家畜の飼養は、そのものが持つ能力を充分に発揮させて、高い生産をあげ、経済的でなければならない。

そのためには基本的にどのような要素が関与するかを知る必要がある。私はつぎの等式によって示されると考える。生産＝遺伝×環境すなわち、よりよい生産をあげるためには、遺伝的によい素質（因子）を持った品種を選び、これをよい環境で飼養することによって得られる。

そこで環境とは何か、気象は勿論のこと、畜舎から管理、飼料などに至るまですべて環境要素である。これらのうちで最も重要な環境要素は飼料であるといえる。

家畜生産費の50～80%あるいはそれ以上を占めるものは飼料費であり、また前述のように家畜に要求するのは能力で、この能力をつかさどるのは計量因子である。これらの計量因子はきわめて環境の影響を受け易いので、実際生産に当っては、この要素が重要になってくるわけである。

3 豚の飼養

元来豚を飼うということを端的に言えば、如何なることか、それは人間の側からいえば、豚に餌

（飼料）を与えることで、豚の側からいえば与えられた餌（飼料）を摂取して、消化し、その中から栄養素を吸収して、成長し、繁殖（生産）し、老衰して、死すという一連の生活現象を営むことである。

したがって飼料を与えることは、栄養素を与えることで、与えられた栄養素で豚は生活し、生産をあげることになる。

栄養素にはどんなものがあるか、それは、蛋白質、脂肪、炭水化物、ミネラル、ビタミンなどで、これを五栄養素と呼んでいる。動物はこれらを摂取して、自己の体を作り、成長し、繁殖する。

動物体の構成蛋白質（内臓々器、筋肉）は飼料中の蛋白質よりのみから作られ、他の栄養素からは作られないし、代用できない。これが飼料中には必ず一定の蛋白質の含量が必要な理由である。

なお動物体の重要な構成部分は骨格である。骨の重要成分はカルシウムと磷であるので、この要素の欠乏は発育その他に重要な影響がある。

豚のような発育の迅速な多産な動物の飼養にはとくに以上の栄養素の給与に注意せねばならない。またビタミン類は動物体内では作られないのが原則であるから、絶えず飼料として、補わねばならない。

4 繁殖母豚および肉豚の飼養

母豚飼養の主体をなすものは、年間の繁殖回数を多くして、多数のよい仔豚を生産することにある。そのためにはまず分娩仔豚を早期に離乳することが必要で、この目的のために人工乳飼料の研究がなされ、製造されている。

すなわち、早期離乳ができると、（3～4週令）年に2.5産の高い分娩回数が確保でき、同時に母豚の体力消耗を防ぐことができる。

肉豚肥育の要点は、成育を早め（肥育期間の短縮）、飼料費の節減を計ることである。そのためには、たとえば一定の体重（90kg位）にするに

は、肥育期間（5～6カ月）、飼料費（7,000～8,000円）は、どのくらいであげるか目標を決め、これを各月に発育予定、飼料給与量などを割当て、この予定目標によって実施する。いわゆる積極養豚を実施すべきと考える。慢然とこれだけの飼料を、これだけの期間与え、これだけの体重の豚になったというような養豚でなく、あくまでも経済的な積極養豚の実施でなければならない。

5 立地条件を生かしての養豚

家畜飼養上必要なことは、その地の立地条件を生かして行なうことである。すなわちその土地の気象条件、生活様式、産業構造、飼料状況など充分考慮して、これらに適する品種、飼養方式、豚舎の構造、あるいは飼料配合などを確立すべきで、徒らに絶対能力を追求する余り、立地条件を忘れてはならない。あくまでも立地条件を考慮した、相対能力追求の経済養豚を確立指導すべきと思う。

乳牛の飼養規模と管理の問題

西 山 太 平（宇都宮大学農学部）

近年乳牛飼養は多頭化の傾向にあり、わが国の乳牛飼養農家は昭和41年36.1万戸、乳牛頭数は131万頭となっているが、1戸当り飼養頭数は35年の2.0頭から41年の3.6頭となり、40年には府県では5～6頭以上の飼養戸数が11%、北海道では10頭以上が9%をしめるに至った。しかし乳牛多頭化にともない種々の問題が起きているが、管理上からみて、畜舎施設、労働力、土地、資本、経営形態、ひいては酪農所得の問題などが派生している。

1 多頭化と牛舎施設

畜舎施設など資本の固定化の大なることは好ましくなく、また建物施設などの騰貴は著しいが、多頭化にともない機械化、省力化ないし生産性向上の立場から投資を迫られている場合が少なくない。まず最小規模として1～2頭飼養の場合は、従来の役畜舎を改造した在来牛舎で足り、労働手段も殆んど人力で大なる支障はなかった。ときには運搬などのため機動車の利用ぐらいで足りた。5頭以上になると、牛舎はスタンション方式とし、農機具施設として電牧、フィードチョツパー、給排水完備、ミルク車機動車を、10頭以上となるとさらにクレーンを備え、20頭段階では場合によってはセミルーズバーン方式の牛舎とし、前記農機具施設を完備し、自由採食、3頭ヘリングボーン式パイプラインクレーン、ストレージなど

、50頭以上ではさらにマニアーロッダー、8頭ヘリングボーン式、パイプラインクレーン、ストレージとするなどして、生産性の向上をはからねばならないが、現状ではそれら牛舎、施設や管理技術の不適合のため、多頭化しても、必ずしもビューヘル(Buicher)の大量生産の法則に従わない場合が少なくない。とくに牛舎については管理作業や環境、とくに防暑の考慮が必要で、従来庇蔭樹、撒・灌水、送風、冷房、涼時放牧、牛舎の構造・形式、飼料の質的改善などが行なわれている。

2 労働力（省力管理）

飼育管理労働費は牛乳生産費中25%内外をしめ、とくに近年労賃の高騰は最も著しい。作業別では飼料調理給与は放牧、給餌回数の減少、給餌の自動、機械化などにより、牛乳運搬は生産乳量の増加により割合省力されているが、しき料搬出入、搾乳、牛乳取扱はまだ飼養規模の過小により、それほど管理労働時間は節減されていない。前記飼養規模別牛舎施設からみて、1～2頭飼いのときは1頭年間777～538時間、5頭飼いのときは276時間、10頭飼いのときは200時間、20頭飼いのときは140時間内外ですむべきであるが、実際はそれぞれ、747～517時間、362時間、326～290時間、279～209時間内外（昭和40年）要しており、さらに適切な牛舎施設、管理技術などが必要である。